

学生サークルによる割箸回収活動についての質的調査の試み

Qualitative Survey on Recycling of Disposable Chopsticks by Student Circle Activity

福井 智紀*, 阿比留 悠**

*麻布大学環境保健学部, **株式会社・山室

Tomonori FUKUI *, Yu ABIRU **

* College of Environmental Health, Azabu University, 1-17-71 Fuchinobe, Sagami-hara, Kanagawa 229-8501, Japan
** Yamamuro Co., Ltd., 2-8-4 Fukuura, Kanazawa, Yokohama, Kanagawa 236-0004, Japan

Abstract: A student circle of Azabu University recycles used disposable chopsticks in a shopping street. The effects and problems of this activity were surveyed by qualitative research design. The conversation with student and clerks in recycling activity was recorded. The recorded data were transformed as protocols. Furthermore, an interview and questionnaire were carried out to complement qualitative data. The following effects of the activity was shown by the qualitative data (protocol data).

1) Activities have the possibility to spread out from around the store, because the surrounding people have interest in the activities.

2) Understanding of the clerks (cooperators) were deepened gradually.

3) Human relations were deepened through the recycling activity.

4) Clerks (cooperators) realize an economical advantage. Because of that, gratitude is shown.

But, the following problems were shown.

1) It is necessary to re-examine the times when students visit stores to receive disposable chopsticks.

2) It is necessary to re-examine the intervals when students visit stores to receive disposable chopsticks.

3) It may be dangerous to depend on only personal relations to continue the activities for a long time.

We think that qualitative research design is an effective methodology for evaluation and improvement of student's recycling activities.

Key words: Qualitative Research, Qualitative Data, Students' Contribution to Community, Effects and Problems of Recycling Activity

1. はじめに

(1) 研究の背景

本学では、環境系のサークル活動を通じて、リサイクルやボランティアなどに積極的に関わっている学生が少なくない。学生にとって、こうした活動の成果と課題を把握することは、自らの達成感や自己効力感を高めつつモチベーションを持続し、さらに後輩学生へと活動を継承していくために不可欠と言

える。しかし、学生が自分たちの活動を第三者の目線で評価することは意外と難しい。こうした場合にはまず、活動に関わる外部の人々に対するアンケートやインタビューを実施することが考えられる。もちろん、こうした試みは重要である。しかしこれだけでは関係者や当事者の「本音」を捉えることは困難であろう。例えば、ニュース番組の街頭インタビューの場面でマイクを向けられた市民は、そこで期待されている回答を敏感に察し、自分の見解を全面

に押し出すよりも場面に応じた回答をする。これと同様に、学生のサークルについて協力的な人物であるほど、学生の意欲や心情を察してあたりさわりのないコメントをすることが予想される。

ところで、アンケートやインタビューによって得られたデータは、自由記述回答を除いて通常は数値化され、統計的検定が実施されたり、図や表に要約されたうえで考察されることが一般的である。こうした数量的な分析を目的とした調査を「量的調査法」と呼ぶことがある。これに対して、長期間の聞き取り調査や参与観察などを重視する「質的調査法」と呼ばれる調査方法もある。筆者らは、学生の環境系サークル活動の成果と課題を把握するためには、この質的調査法の範疇に含まれる手法が有効であると考えた。

そこで本研究では、環境系サークルの中心メンバーのひとりとして活動してきた阿比留が、自ら活動を推進しながら自身の手によって活動を記録するという、質的調査法に基づく調査を実施した。

(2) 調査対象とした割箸回収活動

ここで、本研究において調査対象とした割箸回収活動の実態について簡単に説明する。ただし、これらの記述は、阿比留が在学時点のものである。

使用済み割箸の回収活動は、麻布大学内の「地球サークル環境村」というサークルが2002年から始めていた。そのサークルに阿比留が入って割箸回収活動のリーダーとなった翌年、メンバーと議論を重ねた結果、A商店街にも回収の輪を広げることとなった。A商店街を選んだ理由としては、麻布大学のキャンパスと同一の地域であることと、多くの麻布大学生が利用していることによる。

費用については、割り箸を製紙工場へ送るための送料の一部として、月に500円程度を店舗側にも負担してもらうという選択肢もあった。しかし、金銭的な話をもち出すと協力が絶たれてしまう店舗もあったため、無償で回収することに決めて協力店舗を探すことにした。その結果、3店舗の協力が得られ、2004年から本格的に回収を開始した。A商店街には飲食店は十数店あるが、鮎屋・蕎麦屋・居酒屋などでは竹製の割箸を使用している店舗が多い。しかし、竹製の割箸は木製の割箸に比べて紙へのリサイクルが難しいため、サークルでは取り敢えず木製の割箸

のみを回収することにした。麻布大学内での回収では、4カ所の回収ボックスから、月平均で概ね15キログラムの回収量を記録した。一方、A商店街の回収では、3店舗の合算として、月平均で概ね20キログラムの回収量を記録した（いずれも当時）。回収後の割箸は製紙会社に送り、製紙原料の一部とした。なお、回収にあたっては、まず竹箸や塗箸などのリサイクル困難なものを手作業で完全に除去し、梱包のうえ、サークル側が送料を負担した。

(3) 研究の目的

このような活動を通じて、阿比留は回収に協力してくれているA商店街の人々が、この活動にどのような思いをいただいているかについて知りたいと考えた。また、それを知ることで、活動の成果と課題を明確にし、今後回収の輪を広げていき、さらにそれを後輩たちにも引き継いでいくための方策を検討できると考えた。そこで筆者らは協議のうえ、質的調査法を中心とする調査によって活動に関わる質的データを可能な限り詳細に収集し、A商店街における割箸回収活動の成果と課題を明らかにすることを研究目的として設定した。

ただし、質的調査法という手法は、本稿で紹介する内容よりもさらに体系的かつ綿密に計画・実施されるものであり、調査対象や調査期間もより広範囲・長期間にわたるのが一般的である。今回は、サークル活動の現状や、データ収集者が阿比留のみであることなどの制約から、リサイクル活動への協力を受けている3店舗の人物に対する、約半年の間の断片的な調査データしか得られていない。ゆえに、厳密な意味での質的調査法や質的データという語句は不適切かもしれない。本稿で述べる研究成果は、環境・リサイクル活動を分析する際にこのような手法がどの程度の有効性をもつのかを判断するための、予備的・試行的な調査段階に位置づけられる。

2. 調査方法

(1) 質的調査法について

すでに述べたように、本研究では質的調査法の可能性に着目して、質的データを収集するための調査を実施した。これによって、通常のアンケートでは聞き出せないような関係者の率直な意見や「本音」

を少しずつ探りだすことを試みた。

まず、質的調査法とは何かについて簡潔に述べる。本研究のデータ収集にあたっては、佐藤（1992）によるフィールドワークの概説書を主として参考にした。本書において佐藤は「質的（定性的）方法」という言葉を用いつつ、この方法の語義を次のように解説し、この方法の定義の難しさにも言及している。すなわち、この方法を、「主にインテンシブなインタビューや参与観察のような余り定型化されない方法でデータを集め、その結果の報告に際しては数値による記述や統計的な分析というよりは言葉による記述と分析を中心にする調査法。臨床的方法や生態学的心理学などを加える場合もあり、定義は一定していない。さらに、いわゆる「質的データ」や「カテゴリカル・データ」と、基本的な調査デザインと哲学としての質的調査法とを混同する傾向が事情を複雑にしている」と述べている（p.25）。

一方、質的調査法について広く概説する Merriam（2004）も、「質的調査法とは、包括的な用語であり、そこには多くの形態が含まれる」（p.13）としている。その上で、（教育分野における）質的調査法についての主なタイプとして「基本的または一般的」「エスノグラフィ」「現象学」「グラウンデッド・セオリー」「ケース・スタディ」の5つを挙げている。そして、これらはタイプは異なるにもかかわらず、次の5つの本質的特性は共通していると指摘している。すなわち「① 理解と意味を引き出すことが目標」「② 調査者がデータ収集と分析の主たる道具」「③ フィールドワークの活用」「④ 帰納的方向性をもった分析」「⑤ 調査結果は十分に記述的」の5つである。

また、心理学分野のための質的調査法の概説書 Willig（2003）は、質的なデータの収集法として、「半構造化面接法」「参与観察法」「日記法」「フォーカス・グループ」の4つを紹介している。そのうえでさらに、「グラウンデッド・セオリー」などの6つの方法論についても解説している。

このように、質的調査法とは、場合によっては研究の前提に対する哲学的な態度をも含む多義的な用語である。具体的な調査方法や方法論もさまざまなものが提唱されている。本研究では、こうした議論に深入りするための準備もなく、またそのこと自体が目的ではないため、取り敢えずは佐藤に従いつつ、

アンケートでは得られないタイプの質的データを出来るだけ詳細に記録・収集することを研究方法の柱として定めた。

(2) 質的調査法を用いた先行研究

次に、本研究を進めるに当たって参考にした質的調査法による先行研究を紹介する。まず、西ら（2000）は、「参与観察」と呼ばれる質的調査法の一つを用いて、低所得コミュニティにおけるリサイクル運動についての調査・考察を行っている。彼らは、約1ヵ月半にわたってマニラ首都圏のリサイクル活動の中心メンバー宅に住み込み、生活をともにし、リサイクル活動に参加した。そして、参加形態が異なる世帯への聞き取り調査として計28世帯へのインタビューを実施している。さらに、他の地区への同様の調査やNGO職員・行政官へのインタビュー等も実施している。彼らは、「参与観察による長期にわたる住民との共同生活の中で、住民との間に信頼関係が築かれ、通常のインタビューより詳細な内容を聞き出すことが可能になったと考える」と述べている。また、活動の参加者やそれ以外の人々も含めた社会的関係について、「より深い内容を知ることが出来た」としている。この研究は規模こそ異なるものの、リサイクル活動に調査者自身が参加しながら質的データを得るという点で、本研究と枠組みが類似している。

次に、八ツ塚（1998）は、1995年の阪神大震災で活躍した企業組織、公益団体、NGO団体という異なるタイプの組織を対象に、ボランティア活動の当事者への聞き取り調査を実施した。サブタイトルは「参与観察と聞き取り調査」となっているが、本文献では聞き取り調査に基づく9団体の事例の報告が主な内容となっている。ボランティアやリサイクルなどの活動には、同様の目的を共有する異なる人々が関与することが多い。そうした異なる立場の人々に広く目配りをした調査として、この研究は本研究との類似点がある。

上記の八ツ塚も関わる研究報告である渥美ら（1995）は、阪神大震災におけるボランティア組織について、参与観察に基づいて、組織の活動内容や成立過程を分析・紹介している。その上で、「広域トライアングルモデル」というモデルを導入し、その観点から考察を深めている。この研究は本研究とは問

題意識や枠組みこそ大きく異なるものの、調査者自身がボランティア活動への参加者であるという点は類似しており、検討・分析の進め方などについても参考になる。

(3) 調査手順

以上を主に参考としつつ、本研究においては、以下の具体的な調査手順によることにした。まず、日常の回収の際に阿比留と協力店舗の人々との会話を、ICレコーダーで録音した。次に、これを再生しながら文字へと書き起こし、その日の店舗の様子や人物の行動などを書き加えることによってプロトコル・データにした。具体的な手順は主に佐藤（1992）に示された方法を直接の参考とした。なお佐藤は、フィールドでの記録を「フィールドノート」と呼んでいるが、本稿では以下「プロトコル」を用いる。厳密なプロトコル（・データ）の記述と解釈については、海保ら（1993）が詳しく論じているが、今回は後述するように、会話・発話と行動や状況について記録する簡潔な内容に留めた。

なお、プロトコルに基づく考察をより確かなものとするため、今回は調査の最後の段階で、アンケートとインタビューによる調査も実施した。

3. 結果と考察

まず、質的データがどのようなものとなるか、その概要について説明する。上記の調査手順の結果、例えば以下のような質的データが得られた。

[2005/9/2 (金)]

○B店 (略)

○A店

訪問するとちょうど、AWがドアの前に立っていた。(057)

阿比留「こんにちは」(058)

AW「どうもー」(059)

阿比留「どうもー」(060)

階段より回収 (061)

阿比留「どうもお世話様です」(062)

AWが冷蔵庫よりジュースを取り出し、(063)

AW「りんごジュースね」(064)

と言って渡してくれた。(065)

阿比留「ああ、どうもありがとうございます」(066)

AW「なかなか（ふたが）開かないから頑張ってるね」(067)

阿比留「はい、ありがとうございます」(068)

AW「どうもね。ありがとう」(069)

阿比留「どうも」(070)

AW「暑い中ご苦労様」(071)

阿比留「はい」(072)

上記のうち、AWは40代女性である。このほか、今回得た質的データでは、最終的に次の人物について記録が残された。すなわち、A店のAMは40代男性、ADはAWとAMの娘（中学生）である。B店のB1は30代男性、B2は50代女性、B3は40代女性、B4は40代女性、Cは60代の女性店主で、リサイクル協力店の隣の店主である。D店のDYは30代男性、DWは50代女性、DMは50代男性である。なお、阿比留が直接何度も足を運んでいるため、当然ながら各人物のパーソナリティについては、もう少し詳細に把握できている。しかし、プライバシー保護の観点から、ここでは性別と年齢層のみを紹介しておくに留めたい。

なお、データには考察のため、上記のように整理時に行末に通し番号を付した。また、以下のデータ中に度々見られる「〜」の部分は、録音データを再生してもよく聞き取れなかった箇所である。

3店舗でリサイクル活動（使用済み割箸の回収）を始めたのは2004年からであるが、今回収集したデータは、2005年7月29日から2006年1月26日までの、約半年間のものである。

以下では、活動の成果や今後の可能性を示す部分と、課題を示唆する部分とに分けて、データの一部を逐次紹介しながら考察を述べる。

(1) 活動の成果や今後の可能性を示すもの

① リサイクル活動の波及効果

まず、割箸回収活動は回収店舗の隣店などの対象店舗以外の興味も引くことが示唆された。すなわち、もっとも協力的な店舗への訪問を繰り返すことによって、他の店舗への波及効果が期待される。いくつかの回収拠点から協力が水平的に拡大していく可能

性がある。ただ、興味を持ってもらうことは重要な一歩ではあるものの、それを実際の回収への協力にまでつなげてゆくことは、そう簡単なことではない。回収活動をわかりやすく示したパンフレットを持参するなどして、後述するように回収が店側の経済的利益にもつながるということを、機会を逃さずアピールすることが必要となる。プロトコルのような質的データを豊富に集積していき、後に見直すことで、活動を広げるためのチャンスがどのような場面に多いかや、その時の適切な対応方法などを反省的に検討できる。別々の者が行った回収活動のプロトコルを共有データとし、定期的に反省ミーティングなどで活用することがさらに望ましい。

[2005/10/6 (木)]

○B店

阿比留「こんにちは」(098)

B1「はい」(099)

阿比留「あっ、どうも。いつもお世話様です。ありがとうございます」(100)

軒下に回収物が置いてあったので回収していると、隣の店の人が声をかけてくる。(101)

C「~~~~~、大学生？」(102)

阿比留「はい、麻布大学です」(103)

C「何するの？」(104)

阿比留「あの一、紙にリサイクルできるんです」(105)

C「あっ、それであれするの！」(106)

B3が出てくる。(107)

B3「持てる？」(108)

阿比留「結構ありますね？」(109)

B3「うーん、ちょっと間が空いたから」(110)

阿比留「そうですね」(111)

B3「大丈夫？」(112)

かごに入れていると、(113)

C「全店回ったら大きいんじゃない？ねえ？」(114)

阿比留「そうですねえ。結構...」(115)

C「ただ、協力してくれるところと、ね、」(116)

阿比留「ええ」(117)

C「協力しないところとねえ」(118)

途中で、かごがいっぱいになってしまう。(119)

B3「大丈夫？」

(以下略)

② リサイクル活動への理解の深化

活動に協力している人々にも次第に変化が見られることがある。具体的には、回収協力店舗の人々は、当初はただ割箸をまとめて渡してくれるというだけであり、リサイクルや学生の環境活動そのものについて特別の関心があるわけではない。しかし、協力を通じて、リサイクル活動などサークルの環境への取り組みの背景や他の活動全般にも興味を持つことがある。①の活動成果は、協力者を水平的に拡大していくという可能性を示していたが、この場合には現在協力している人々に理解をさらに深めてもらうという、いわば垂直的な理解の深化が期待される。逆に言えば、活動に先立って理念や活動内容を説明することも重要ではあるが、まずは回収作業への取り敢えずの協力(使用済み割箸を一カ所に保管、できれば事前の洗浄も)を得ることに何とかこぎつけて、実際の活動に触れてもらうなかで徐々に活動への理解を深めてもらうというアプローチも有効である。ただ、この場合にも①の場合と同様、機会を逃さないためには事前の準備などしておくことが効果的であるし、機会を有効に活かしているかについての定期的な反省も必要であろう。

[2005/10/14 (金)]

○B店 (略)

○D店 (略)

○A店

阿比留「どーも、こんばんは」(151)

AW「どーもね。お世話様」(152)

阿比留「お世話さまです」(153)

AW「ねえ、学部なの？集めてるの...サークルじゃなくて？」(154)

阿比留「えーと、サークルです」(155)

AW「何サークルって言うの？集めてやってるの...」(156)

阿比留「地球サークル...」(157)

AW「地球サークルって言うのがあるんだ？」(158)

阿比留「地球サークル環境村って言うサークルが

集めています」(159)

AW「うんうん...。で、君の名前教えてくれる？」
(167)

阿比留「阿比留って言います」(161)

(中略)

AW「まあ、いつもご苦労様。地球サークル...？」(168)

阿比留「地球サークル環境村です」(169)

AW「覚えとかないとね。いつも持ってってもらってる...。いつもありがとう！」(170)

阿比留「どうも、いつもお世話さます」(171)

③ 回収時の交流による人間関係の深化

割箸回収活動は、ただ割箸をもらって帰るという事務的な作業ではない。そこでは、回収者と店側との間で様々なやりとりが交わされる。時にはそれは、プライベートな内容にまで及ぶ。そうした交流によって、まずは名前を覚えるといった段階から、次第に人間関係が深まっていく。こうしたリサイクル活動によって地域との人間関係・信頼関係を築くことは、学生の活動に対して地域の継続的な協力をもたらすことにつながり得る。さらには、地域の大学への肯定的なイメージを喚起するなど、多様な意義が見出しうる。プロトコルのような質的データは、こうした人と人とのやりとりをそのままデータとして残すものであり、人間的な交流が深められていくようすを直接データから示すことができる。

[2005/10/21(金)]

○B店 (略)

○D店 (略)

○A店

阿比留「あっ、どうも。こんばんは」(215)

AW「アビルユウくん」(216)

阿比留「はい」(217)

AW「忘れるわけないよ」(218)

阿比留「どうも」(219)

AW「ご苦労様」(220)

阿比留「いつもお世話様です」(221)

AW「いえいえ、こちらこそありがとうね。ちょっと待ってね、りんごジュース...。あっ、就職決まった？」(222)

阿比留「まだ決まってないですね。」(223)

AW「まだいいの？これから？」(224)

阿比留「いやいや、いま卒論をこれのことでやっているんですよ」(225)

AW「ほおー」(226)

阿比留「いつも録らせてもらって...」(227)

AW「教師になるんだっけ？」(228)

阿比留「はい、一応...」(229)

AW「あっ、教員受けるんだ...」(230)

(以下略)

④ 回収協力による店舗側利益の実感と感謝

割箸回収活動について、基本的には店舗側は善意で協力してくれていると思われる。ただ、活動に長期的に協力してもらうためには、店舗側にも何らかの直接的利益やインセンティブがある方が望ましい。この活動の場合には、割箸を回収してもらうことによって、店舗側にもわずかではあるが経済的利益がある。すなわち、商店街のゴミの回収は事業系扱いとなるが、相模原市では事業系のゴミは直接回収しない。そこで、各店舗・商店街は市が許可する民間の「一般廃棄物収集運搬許可業者」と、有料での回収契約を結ばなければならない(相模原市のウェブサイトを参照)。多少ともゴミの排出量を減らすことは、店側のコスト削減にも結びつくのである。

下記のプロトコルでは、AWはかつて自らが回収活動に直接関わっていたことを示唆しつつ、現在の学生サークルによる回収によって、多少とも経済的利益が生じていることを示唆している。善意として回収活動に協力してもらうだけでなく、わずかでも直接的な利益やインセンティブをもたらすことをわかりやすく示すことが、今後さらに必要であろう。

[2006/1/23(月)] ※割箸回収ではなく後述のアンケートを受取りに訪問した。その際いちおうプロトコル化しておいたものからの抜粋であり、行末番号は付していない]

(前略)

阿比留「あっ、どうも。アンケートを回収に来ました」

AM「あっ、はいはい」

厨房の方へとりに行く。

阿比留「どうもありがとうございました」

AM「こんな感じで...」

阿比留「あっ、はい。(アンケートを見ながら) ありがとうございます」

AM「まあ、非常にウチとしては助かっています」

阿比留「あっ、ありがとうございます！」

AM「この辺は事業系(ごみ)だからさあ」

阿比留「ええええ」

AM「有料化...」

阿比留「そうですね、有料のごみ袋になっちゃいますもんね」

AM「ウチも昔、こういうの(割箸のこと)集めて、S(県)だかT(県)だかそっちの方に送っていたこともあるんだけど...。まあ、こうやって(回収を)していただいで助かりました！」

(後略)

(2) 活動の課題や問題点を示すもの

① 回収日時の再検討が必要

この割箸回収活動では、回収日時の曜日や時間を特に定めてはいなかった。このことについて、当初は問題点としては認識していなかった。しかし、例えば次のプロトコルのように、回収のタイミングによっては店舗側に迷惑を掛けているのではないと思われる場面があった。プロトコルでは、店舗側は現状でも構わないという態度をとっているが、客観的に見れば迷惑を掛けてしまっている感じは否めない。店外に置いていってもらおうという形も考えられるが(実際にそうして回収したこともある)、店舗側に余計な手間を掛けさせるうえ、虫が湧いたり悪臭の原因になったり、店舗外の印象を損なう怖れもある。とは言え、事前にアポイントや回収日時を確定しておくことによって、店舗側の心理的負担を増してしまうことも考えられる。現実的な解決策としては、店舗毎に営業形態をこちらで把握しておいて、もっとも迷惑のかからない時間帯・曜日を見計らって、回収に訪れるということである。自分たちの善意の行動が他者に迷惑や心理的負担を掛けているという可能性は、自分たちで気づくのは大変難しいことである。今回のデータによって、自分たちの活動を一步離れた俯瞰的な視点から、反省的にとらえることができたと言える。

[2005/10/21(金)]

○B店

軒下になかったので、店をのぞく。(172)

阿比留「こんばんは」(173)

客がたくさんいたため、気づかない。少ししてB1が気づき、(174)

B2「はい」(175)

阿比留「こんばんは、いつもお世話様です」(176)

B3が奥から出てきて、(177)

B3「割箸?ちょっと待っててね」(178)

と言って戻り、袋を持って出てくる。(179)

阿比留「あっ、どうもすみません。いつもお世話様です」(180)

B3「いえいえ、ごめんね」(181)

阿比留「あの一、いつも決まった時間に来た方がいいですかね?」(182)

B3「いいですよ」(183)

阿比留「いいですか?」(184)

B3「うん、それで大丈夫だよ」(185)

阿比留「はい、わかりました。どうもすみません」(186)

B3「はい、どうも」(187)

② 回収間隔の再検討が必要

既に述べたように、この割箸回収活動では回収日時を特に定めてはいなかった。次のプロトコルのように、回収の間隔が空きすぎるとカビや悪臭の原因になることがある。特に、夏場は深刻な問題となる。これでは明らかに店舗側に不快感を抱かせることになる。後述のアンケートでも、この点を問題にし、「これから暑くなると、洗った後よく乾かさないと、カビが発生したり、臭くなるので、チョット大変かな?と思っています」という回答が見られた。ただ、店外に置いていってもらおうという形も、先ほど述べたように、万全の解決策とは言い難い。屋外の虫などが集まる怖れもある。

[2005/11/17(木)]

○B店 (略)

○D店

阿比留「お箸ありますか?」(302)

DYが持ってくる。(303)

DY「カビてるよ。たぶん」(304)

阿比留「あっ、そうですか。じゃあ、洗っておきます」(305)

DY「だって取りに来ないんだもん」(306)

阿比留「すみません」(307)

○A店(略)

回収間隔を短くし、学生がもっとこまめに回収に訪れる方法もあるだろう。しかし、あまりに頻繁に訪問すると、かえって迷惑を掛けるかもしれないし、回収効率も悪くなる。また、訪問しても渡すべき割箸がないと、下記のように、かえって「申し訳ない」という感覚を協力者に抱かせてしまうかもしれない。今回のプロトコルでは、個々の店舗からの回収量を毎回測定して数値化することをしていなかった。得られた質的データをプロトコルへと整理する際に回収量などの数値データを同時に記しておき、季節に応じた回収量の変化や店舗ごとの反応などのデータを蓄積していくことによって、その店舗にとってもっとも適切な間隔で学生が回収に訪れることが出来るようにしていく必要がある。

[2005/11/17(木)]

○B店

(中略)

阿比留「あっどうも、いつもすみません」(293)

B4「他にない？」(294)

と言いながら外に出てくる。(295)

B4「最近、(店が)暇だったから…」(296)

阿比留「ないですね」(297)

B4「はい」(298)

阿比留「はい。すみません、どうも」(299)

B4「また貯めておきます」(230)

阿比留「よろしくお願いします」(231)

③ 個人的関係に頼る危険性と活動の長期的継続性
すでに紹介してきたプロトコルからもわかるように、この割箸回収活動では、回収者と協力店舗との個人的な信頼関係が活動継続の鍵となっている。これは、成果の③で述べたように、望ましい関係であると言える。しかし、この活動を長期的に見た場合には、回収者と店舗側との1対1の関係だけに、こ

の活動を矮小化してしまう危険がないわけではない。同一店舗に半年以上、特定の人物が訪問すれば、その危険は少なくないであろう。一方で、回収活動では成果の①で述べたように、協力者がリサイクル活動などのサークルの取り組みの背景にも興味を抱く瞬間がある。そうした契機を活かしつつ、活動を個人対個人から地域対大学サークルという、より広い文脈の中に位置づけてゆくような視点が、長期的な活動の継続にとっては重要となる。そうでなければ、回収者の卒業などを契機にして、店舗と大学サークル側との関係性が大きく変化してしまうこともあり得る。

(3) 補足的アンケート及びインタビュー

調査活動の最後に、質的調査法によるデータ収集を補完し、調査方法に問題や見落としがなかったかを判断するため、アンケートとインタビューを行った。インタビューをプロトコル化したもののうち、本研究に示唆を与えるものについてすでに紹介した。そこで以下には、協力店3店舗に対するアンケート調査の質問項目と結果をすべて示す。

- ① 私たちが回収を始める以前に、割り箸が紙製品としてリサイクルされていることを知っていましたか？(はい・1/いいえ・2)
- ② ①で、はいと答えた方は、そのようなりサイクル活動に参加しようと思っていましたか？(はい・1/いいえ&どちらでもない・0)
- ③ 私たちのおこなっている割り箸リサイクル活動に協力してよかったですか？(はい・3/いいえ&どちらでもない・0)
- ④ 割り箸を分別することは大変ですか？また、どのような点が大変ですか？(はい・1/いいえ・2)
- ⑤ はいと答えた方は、詳しくお答えください。(これから暑くなると、洗った後よく乾かさないと、カビが発生したり臭くなるので、ちょっと大変かなと思っています。)
- ⑥ 毎週、決まった曜日・時間に回収してほしいですか？(はい・1/いいえ・2)
- はいの場合、何曜日の何時ごろがいいですか？(無回答)

⑦ 割り箸回収に協力してよかった点・悪かった点はなんだと思いますか？

(良かった点：ごみが減った。／A 駅周辺のごみ収集は有料ですので、箸の分だけほかのごみを余分に出せます。／ごみの量が減った。リサイクルされること。)

(悪かった点：手がかかる。／取りに来るのが来なかったりして、カビが生えてしまうこと。)

⑧ その他、ご意見等ありましたらお願いします。(良いことなので、頑張っていてほしい、続けてほしい。)

この結果、アンケートに記されていることの大部分は、質的なデータから示唆されることと共通していることがわかる。このことから、アンケートと質的なデータ収集を組み合わせることによって、アンケートで回答されていることが具体的にどのような場面と関わっているか具体的に理解したり、あるいは回答者が意図したことをより正確に把握したりすることが容易になる。しかし、厳しい見方をすれば、今回の質的データは質・量ともにまだまだ不十分なものであるため、アンケートを越える「意外な事実」や協力者の「本音」を発掘することが十分にできなかった(そのためアンケートと質的データの結果にあまり違いが見いだせない)と考えることも可能なのである。

暫定的な結論ではあるが、今回の規模の調査では、質的データの収集だけではなくアンケートやインタビュー(質問項目やインタビューの目的をあらかじめ定めているもの、すなわち「構造化インタビュー」)とを適宜組み合わせることが、活動を反省的に分析するためにはもっとも効果的な方法であると思われる。

4. おわりに

今回、不十分な形態ながらも質的調査法を中心とするデータ収集を実施できたことによって、A 商店街における割箸回収活動の成果と課題を批判的に検討することができた。ただ、この方法はデータの収集や整理・分析が非常に大変である。今後どれだけ本格的に行うべきかは、費用(手間)対効果という

観点から考えると即断は難しい。しかし、今回紹介したわずかなプロトコルを見ただけでも、大学生のリサイクル活動や環境活動が、地域にどのように歓迎され、その意義を認められ、具体的にどのような会話が交わされているのかが、第三者にも容易に理解出来ると思われる。したがって、活動の外にいる第三者に対して、活動の価値をわかりやすい形で提示するためには、今回のような質的データ収集とプロトコル化は有効な手法である。ただし、研究目的である場合は別として、こうしたデータ収集・分析は、あくまで活動の成果の確認や問題点の改善を目的として行うものである。そのためには、データの収集や記録方法をどれだけ簡便化・ルール化し、複数の収集者やサークル全体の共有データとして活用していくか、という観点からの工夫がまだ必要である。また、割箸回収活動のようなサークル活動や環境活動は、麻布大学に限らず全国各地に見られるものである。今回のようなプロトコル・データを活動主体を越えて共有することができれば、互いの活動への有益な示唆が得られると考えられる。こうした意味でも、質的調査法による質的データの収集と分析には、さらに多くの可能性があると思われる。

謝 辞

割箸回収活動にご理解とご協力をいただいたこと、さらには本研究のための録音データ収集やアンケート等にもご協力いただいたことについて、A 商店街の協力店舗の皆さまに心より御礼申し上げます。

文 献

- 1) 渥美公秀・杉万俊夫・森永壽・八ツ塚一郎. 1995. 「阪神大震災におけるボランティア組織の参与観察研究—西宮ボランティアネットワークと阪神大震災地元 NGO 救援連絡会議の事例—」『実験社会心理学研究』35(2): 218-231.
- 2) 海保博之・原田悦子編. 1998. 『プロトコル分析入門 発話データから何を讀むか』新曜社
- 3) Merriam, B. (堀薫夫ほか訳). 2004. 『質的調査法入門—教育における調査法とケース・スタディー』ミネルヴァ書房(原書: 1998. "Qualitative Research: And Case Study Applications in Education", John Wiley & Sons, Inc.)
- 4) 西麻衣子・城所哲夫・大西隆. 2000. 「参与観察に

- よるマニラ首都圏の低所得コミュニティにおけるリサイクル運動の評価—開発途上国大都市におけるリサイクルシステムの構築に向けて—」『2000年度第35回日本都市計画学会学術研究論文集』：967-972.
- 5) 佐藤郁哉. 1992. 『フィールドワーク 書を持って街へ出よう』新曜社
- 6) Willig, C. (上淵ほか訳). 2003. 『心理学のための質的研究法入門—創造的な探求に向けて—』倍風館 (原書：2001. “*Introducing Qualitative Research in Psychology: Adventures in Theory and Method*”, Open University Press.)
- 7) ハツ塚一郎. 1998. 「阪神大震災における既成組織のボランティア活動—参与観察と聞き取り調査—」『奈良大学紀要』26: 151-165.
- 8) 相模原市のウェブサイト.
<http://www.city.sagamihara.kanagawa.jp/>